やまなし
医療最前線
コロナとの闘い
県立中央病院から
〈210〉

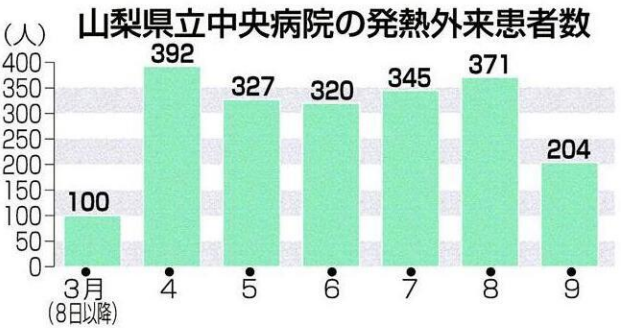
冬の発熱患者増へ体制整備
かかりつけ医と連携強化

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、感染が疑われる患者が一般患者と接触しないように動線を分けて設けられているのが「発熱外来」だ。山梨県立中央病院の発熱外来は10月から、保健所を介した患者だけでなく、地域のかかりつけ医から直接紹介を受けた患者の検査も実施。インフルエンザが流行して発熱患者の増加が想定される今冬への対応を進めている。

病院北側の敷地内に並ぶ複数のプレハブ。発熱などがあり、新型コロナ感染の可能性がある患者の診察や検体採取が行われる発熱外来だ。当初は院内に設けていたが、一般患者との動線をより明確に分ける目的で建物外のプレハブに移した。

一室は総合受付で、常駐する看護師が発熱などの症状や感染者との接触歴を電話で聞き取り、来院時間の調整を行う。隣接する別のプレハブで、医師が診察した上で検体を採取し、院内でPCR検査をする。症状が軽い場合は帰宅させて電話で結果を連絡。検体採取と同時に、測定する血液中の酸素飽和度の数値で重症化の可能性があれば追加の検査を行うこともある。

中込博副院長



発熱外来を開設した3月8日以降、患者は2059人（9月末現在）。1日で30人以上訪れることもあった。患者1人ごとに防護具を取り換え、プレハブの換気や消毒も行うため、中込博副院長は「時間と労力が必要」と話す。8月には患者が車に乗ったまま検体採取できる「ドライブスルー方式」の検査も病院北側で始め、より短時間で多くの患者を診察できる体制にした。

一方、国はインフルとの同時流行を見据え、患者が身近な医療機関へ相談・受診し、必要に応じて検査が受けられる体制の整備を求めている。症状だけでは新型コロナとの判別が難しいインフルが流行して発熱患者が増えれば、保健所への相談を介した従来の手法では対応が追いつかなくなる恐れがあるためだ。

県立中央病院の発熱外来は保健所を介した患者や、発熱のある外来、救急患者に対応してきたが、国の要請を受けて10月から対象を拡大した。検査設備のない地域のかかりつけ医を受診した患者の中で新型コロナ感染が疑われた場合、紹介状を受けた上で検体採取、検査を行っている。

患者のさらなる増加も想定し、「ドライブスルー方式」の検査体制を拡充させ、病院敷地の南側にもスペースを確保した。

「新型コロナ感染の有無が分からない状態では、多くの診療が制限を受ける」と中込副院長。「医師会とも連携を強化して、患者を守っていきたい」

＝第2、4木曜日に掲載します

掲載日：2020年10月22日／ぶんくら／紙面頁012
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社